日本の古典

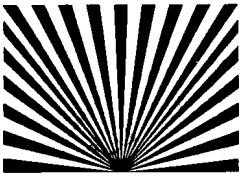
ゼミナール

大野　晋
神田秀夫
五味智英
山本健吉
秋山　虔
山岸徳平
加藤周一

朝日新聞社

日本の古典

ゼミナール



大野　晋
神田秀夫
五味智英
山本健吉
秋山　虔
山岸徳平
加藤周一

朝日新聞社

講師略歴

大野晋　学習院大学教授。大正8年東京都生まれ。著書「日本語の起源」「日本語の年輪」など。

神田秀夫　武蔵大学教授。大正2年東京都生まれ。著書「古事記の構造」日本古典全書「古事記」など。

五味智英　学習院大学教授。明治41年長野県生まれ。著書日本古典文学大系「万葉集」など。

山本健吉　日本文芸家協会理事長。評論家。明治40年長崎県生まれ。著書「大伴家持」「柿本人麻呂」など。

秋山虔　東京大学教授。大正13年岡山県生まれ。著書「源氏物語の世界」「王朝女流文学の形成」など。

山岸徳平　実践女子大学教授。明治27年新潟県生まれ。著書古典全書「平中物語」古典大系「源氏物語」など。

加藤周一　評論家。大正8年東京都生まれ。著書「日本の内と外」「称心独語」など。

◇日本の古典◇定価 950 円◇著者　大野晋　神田秀夫　五味智英　山本健吉　秋山虔　山岸徳平　加藤周一◇昭和49年7月30日第一刷発行◇発行者　朝日新聞社・岡見璋◇印刷所　凸版印刷◇発行所　朝日新聞社（東京・大阪・北九州・名古屋）0391-254067-0042

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目

次

日本語の誕生……大野　晋……5
ヤマトコトバとは何か……7
日本語の親戚語……24
借り入れ語のいろいろ……10
高句麗語と日本語……29
言語の系統――基礎語の対応……15
語彙の発達について……34
言語の系統――文法と発音……20
『古事記』と『日本書紀』……神田秀夫……47
照葉樹林文化の存在……49
銅鐸圏と支配層の発生……71
発音や遺物にみる南方系要素……55
帰化人が果たした役割……76
習俗や文芸にみる南方系要素……59
『古事記』序文について……86
神の来臨における水平型と垂直型……66
『万葉集』の時代（一）……五味智英……89
七世紀前半の政治状勢……92
歌謡から和歌へ……96

大化改新と斉明・天智朝の歌……104
律令国家成立と天武御製……113
和歌の発展……120
人麻呂の享けたものと創ったもの……126
人麻呂の本質……136

『万葉集』の時代（二）……山本健吉……143

大宰府が生み出した文化……145
大伴旅人と大伴郎女の死……150
大伴坂上郎女の役割……158
「酒を讃える歌」について……164
言志と載道……169
山上憶良の文学……174
思想家としての憶良……180

『古今集』と女流文学……秋山虔……189

「国風暗黒時代」について……192
宮廷における和歌の復興……196
和歌と後宮と仮名文字の問題……202
歌合・屏風歌など……205
『古今集』をめぐって……211
『土佐日記』成立の意義……216
女流文学の精神と源流……219

『源氏物語』を中心とした平安文学……山岸徳平……229
平安物語文学の性格……232
大学の荒廃について……262
智育——大学制度と女子教育……239
本才・文才と盈虧思想……265
徳育——仕つけと感情教育……250
紫式部の教育観……269
美育——芸術教育の各種……258
古典およびその後……加藤周一……279
日本文学の三つの特色……281
第三の転換期——江戸前期……298
第一の転換期——平安前期……285
第四の転換期——明治以後……305
再び転換期——鎌倉時代……292

——朝日ゼミナール「日本の古典」から——

装幀・山本耕三

日本語の誕生

大野　晋

日本にまだ文字が入ってこなかったころの日本語は、一体どういうものであったか。文字以前の日本語は、どういうふうにして発達してきたか。その問題を、文字を使うようになってからの材料によって、どう考えることができるか。そういったことをお話ししてみたいと思うのです。私は、文字のない、まだ文字を受け入れなかったころの日本語を、ヤマトコトバという言葉で表わしたいと思いますが、まず、ヤマトコトバとはどういうことであるか、ということから話を始めたいと思います。

ヤマトコトバとは何か

現在、われわれは日本語を話していますが、このように一億も人口を持っている文化国が、一つの言語を使っている。一億の人口が北から南までどこへ行っても、ともかく日本語で話が通じる。こういう国は、世界中に非常に少ないらしいのです。しかし、現在の日本語を考えてみたときに、それは私の申しましたヤマトコトバそのままか。つまり、ヤマトコトバを千年、二千年前から受け継いできていて、そのまま今日の現代日本語として話しているかといいますと、そうではないわけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

です。

たとえば、手近な新聞を見ましても、ドリンク剤とか、ショックとか、メーカーだとか、チェックするとか、パスするとか、デヒドロ酢酸とか、データによればとか、ラットによる試験によればとか、ドル箱スターとか、そういう言葉があります。社会面を見て、ちょっと拾っただけで、こういう単語をたくさん拾うことができます。しかも、日本語は大変おもしろい言語でして、おそらく皆さんは、それほど気にとめていらっしゃらないかもしれませんが、実は日本語の社会では、今あげたような単語、ドリンク、ショック、メーカー、チェック、パス、デヒドロ、データ、ラット、スター、こういう単語はみな、カタカナで書いております。われわれは、これをカタカナ語と呼んでいます。もちろん、カタカナで書く言葉は、こういう種類の言葉だけではなくて、漢字が制限されているため、漢字で書けない言葉をカタカナで書いたりする例が、このごろいくつかあります。しかし、それは文字政策の結果出てきた別のことでして、このカタカナで書いている言葉は、明治以後になってから、ヨーロッパから受け入れた単語であるということを、カタカナで書くことによって示しているわけです。

また、新聞を見ますと、カタカナ語だけではなくて、ひらがながたくさんあります。そしてそれと並んで、多くの漢字が使われております。この漢字は言うまでもなく、もとは中国で、中国語を書くために作られた文字で、中国の言葉を書くために工夫され、発展させられてきた字です。それ

を日本は大陸から学んで、それを受け入れ、それによってはじめて文字を知り、日本語を書くことを始めました。そして現在、日本では、たとえば、行く、来る、取る、美しい、そういう言葉にも漢字をあてて用います。「行く」という時には「行」という字、「来る」という字には「来」という字を使って、「来る」と書いて「来る」と読む。これを、訓と言っています。これは漢字を使っているさまざまの文化圏の中で、必ずしもどこでも行われていることではないようです。実はお隣の韓国では、漢字は日本で使うように、「来る」とか「行く」とか、そういう言葉を書くには使わない。漢字を使った時には必ず、それは中国風に字音で読む。「ライ」とか「コウ」などと読みます。ということは、日本人は漢字を自分のところに取り入れた後で、それを自分の言語を書く手段として、工夫して、それを自己流に使いこなしているということです。

そこで、行く、来るとかいう言葉は、ヤマトコトバに属するものとして、そういう例を除きますと、講堂とか努力とかいう言葉は、すべて中国の言葉を基にしているので、いってみれば、中国から文字とともに、そういう単語が日本語の中に入ってきたのです。これもまた、先ほどのドリンク、ショック、メーカーとかいう言葉と同じように、文化の伝播によって、日本語が外国から取り入れた単語である。してみると日本では、漢字で書き、漢字の音で読む言葉は、中国から来た単語。ひらがなで書き、また、漢字の訓で書く言葉はヤマトコトバ。カタカナで書く言葉はヨーロッパからの借り入れ語というように、現在では、その単語の由来を、漢字、ひらがな、カタカナによって示

しています。

つまり、日本では単語を外国から大々的に借り入れた時期が二度あります。一度は中国からであり、一度はヨーロッパからです。現在の『大言海』という大きな字引は、約十万語の単語を収めておりますけれど、その半分近く、四割五分が実は漢語です。ですから、大ざっぱにいえば、日本語の単語の半分は、中国から借り入れた漢語なのです。しかし、それ以前の日本語で借り入れ語はなかったかというと、簡単にはその答えは出ません。われわれがヤマトコトバであると思っているなかに、実は外国からの借り入れ語があるかもしれません。

借り入れ語のいろいろ

そこで、お隣の韓国の言葉をいろいろ調べてみます。たとえば、日本では今でも鉈（ナタ）というものを使いますが、韓国には nat という言葉があります。これは日本でいう鎌のことです。鎌と鉈では違うではないか、とお考えになるかもしれませんけれど、外国のものが入ってくるときには、しばしば、似ていて、ちょっと違ったものになることがあるので、ことによると、日本語の鉈という言葉は、韓国語の nat（鎌）と関係があるかもしれません。それから野菜を作る畑（ハタケ）、これは日本語では、古い形では Pata といいました。もっと古くは pata であったと考えられているものです。ところ

が、韓国語には pat（畑）がある。魚を取る網に、叉手網というのがありますが、韓国語の方言で sadul と申します。魚を取る網のことです。ご飯を炊く釜、これは韓国でもそのまま kama といいます。頭にかぶる笠は韓国では kas（笠）という形です。このように、韓国語と日本語とを比較してみると、意味と音とが共通である、あるいは非常に似ていると思われる単語があるのです。

今申しましたのは、鎌、畑、叉手網などで、全部道具であります。畑などというのは道具ではありませんが、農業に関係しております。音の形が、現在のわれわれが耳にしているのとは違うものも少しあげてみますと、田舎の何々「郡」というのを「こおり」と呼びます。この「こおり」は日本語で、もっと古い時代には「コフォリ」と言っておりました。これはさらにさかのぼると、「コポリ」であったろうと考えられるのです。ところが、韓国語では kopal（評）という。これは日本語の「コポリ」と非常に近い形をしております。「村」も、韓国語の古い形に maul（村）という形があります。これは日本語の「村」と、あるいは関係があろうと思われます。また、長さの単位として、今はもう使いませんが、一尋、二尋という「尋」という言葉がございます。これは古くは、piro という形と推定されています。これが韓国の古い資料には、pal（尋）とあって、長さの単位に関しています。ですから、pal は日本語の「尋」と関係があるのではないかと思われます。それから、日本語で税金を取りたてるという意味の「徴る」という言葉がございます。この言葉は、古くにさかのぼると、pataru であったと考えられるわけですが、韓国語に pat という語根がありまし

て、これが、責めたてるとか、取りたてるとかいう意味でございます。今あげました、「郡」「村」「尋」「徴る」などは、みな行政、政治、度量衡に関するものです。

このように、道具や行政、度量衡に関する名前が韓国語と関係があるとすれば、ちょうど戦後、アメリカが日本を占領して、いろいろ日本に行政上の指導をしたり、あるいは物を持ち込んだりしたときに、多くのアメリカ語がそのまま日本にカタカナ語として入ってきた。それと同じ事情によって、これらは昔、日本に入ってきたものではなかろうかと考えられるのです。たとえば、「鉛」という言葉がありますが、鉛にあたる韓国語は nap で、これも韓国語から日本語に流入したものと推測して、差し支えないでしょう。このように、中国語の漢字によるもの以外に、ヤマトコトバと思われるものの中に、古代の韓国語から入ってきたと思われるものがあります。

大体、二つの民族がある場合、文化的な、政治的な接触がおこれば、強い文化を持った方の言語は、弱い方の文化、あるいは未発達の文化の方へ、その単語が入ってゆくものです。ですから、先にお話ししたような単語の関係が、韓国語と日本語との間にあるのは、日本文化が朝鮮半島にあった文化を多く受け入れた結果に違いないということを、われわれに考えさせます。それでは今度は、もっと目を広げて、中国から文字を通して多くの単語が入ってきた以前に、日本語が中国語から何か直接に受け入れたものはないだろうか。そのいくつかの例をあげることができます。

たとえば、「文」「簡」「蟬」という言葉があります。日本語の「フミ」という言葉は、中国語の

「文」という言葉を、「フミ」として受け入れたのではないか。われわれが使っている「カミ」というのは、「簡」の転ではないか。「簡」は札という意味で、昔は木の札に字を書いたのです（皆さんは、すでに平城宮址からたくさんの、いわゆる木簡といわれる木の札が出ていることをご存じと思います。昔は紙はたいへん貴重なものでありまして、たくさんはなく、一般には木を切って、削ってそれに字を書いた。それが平城宮址や飛鳥宮址からもたくさん発見されています）。その「簡」という言葉を、「カミ」と聞いたのではないか。また「蟬」を、「セミ」と聞いたのではないかということがあります。その「文」も「簡」も「蟬」も、みなnの音で終わる言葉です。「フミ」ならばmで終わるはずです。ですから、その点が多少違うのですが、「ミ」と「ニ」というのは、聞き違えることが日本語の例の中に多少ありますので、ことによったら、「文」「簡」「蟬」がフミ・カミ・セミの、もとの言葉かもしれません。しかし、これくらいの例ではイエスともノーとも言いかねます。ですから、中国語が漢字を媒介にしないで、日本に生のままに耳で伝わってきたものがあるかどうかということについては、わからないということになります。また、それ以上古いところになりますと、もうわからないのです。

それでは、今度は満州とか蒙古とかの方から、じかに日本に言葉が来ていないだろうか、ということを考えてみますと、多少考えられるものがあります。たとえば、「ウカラ」「ヤカラ」「ハラカラ」などと申しますし、また、「トモガラ」「イエガラ」とも使います場合の「カラ」という言葉が

あります。これは実は満州・蒙古などで kala または hala という形で使われている言葉です。これらの地方で社会制度の基礎として大きな役割を果たしているものの名称ですが、そういう「カラ」にあたる言葉が日本にもあります。これはどう考えても、満州語、蒙古語、ツングース語、そういう言語から、日本に入ってきたものに違いないと考えられます。また、氏素姓と申します「氏(ウヂ)」という言葉があります。この「ウヂ」の古い形と思われる「ウル」という言葉が、やはり満州・蒙古の言語にあるので、その方の言語が伝わってきたものでしょう。ということから、おそらく、そういう社会の組織が、日本に入ってきたことがあるに違いないと思われます。

このように、①ヨーロッパからの借り入れ語、②中国からの借り入れ語、③さらに朝鮮からの借り入れ語、④もっと古く満州・蒙古からの借り入れ語、の四つがありますが、これら以外には借り入れ語はないだろうか。⑤として南方のインドネシア・ポリネシア・メラネシアなどの言語との関係が考えられると思います。たとえば、「目(メ)」の意味の古い形に「マ」がありますが、これらの島々では、目を「マタ」と言います。また、「頬(ホホ)」は古形「ポポ」と思われますが、それを「ビビ」といいます。これらの単語の類似が偶然なのか、それとも、何か古い深い関係があるのかは、いろいろ議論のあるところです。それらの借り入れ語がもしあるとしても、それ以外のヤマトコトバはどのようにして、この島で使われるようになったのか。一体、ヤマトコトバは日本の島だけで発達したものなのか、それとも、その根本となるものが大陸から入ってきたものなのか、あるいは南の方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.